

湿地状態だったこの土地も、住み始めて数年経つと水がたまっているところが増えて見当たらなくなった。歩くとなブツ、なブツとしていたのが、今ではフニユ、フニユという程度になった。当初、こんなところで暮らすと湿気で体を壊すのではないかと真面目に心配していたのが嘘のようだ。それにともなう景色も変わってきた。湿地の象徴のようだったガマの群落がまばらになってきたのだ。そしてその翌年には2カ所に数本が見られる程度になり、その翌年には姿を消したのだ。水環境がちよつと変わるだけで植生はこんなに劇的に変わるのに驚いた。同時にガマの特徴的な穂が見られなくなったことに、ちよつと物足りなさを感じた。わがままな話であるが、ガマが消えただけでなくまだ名前も知らなかった草花も種類が減って、数種類のイネ科の植物と、野菊とセイタカアワダチソウとハンゴンソウがやけに目立つようになってきたのだ。以前、植物の専門の方から湿地は陸地と水辺の両方の性質を持つことから、多様な動植物が見られ生物多様性の観点から重要な環境だと聞いたことがある。ああ、それはこういうことなのだとか納得した。

ただ、春先の雪解けの時期になるとそこかしこに水たまりができるのは以前のままだった。それも一ヶ月も経たないうちに消えていくのだが、あるときそれを二階の窓から眺めているとあちこちにある水たまりが連続した点としてひとつの線が見えてきた。造成された土地なので平坦な土地と決め込んで見ているが、そのなかに水がたまりやすい低いところがあることがわかってきた。そういう目で改めてこの土地を見てみるとかつての丘陵の傾斜に沿ってかすかに北側の隅が高くなっていて家を建てたあたりが一番低く、また南の隅にかけて高くなっていることがわかってきた。水準器で計測したわけではないが、人の目でもそのような微妙な傾斜はわかるものだ。それに考えてみれば北の隅から東の隅に引かれた側溝に水が流れているのは、そのような傾斜があるからに他ならない。その時に、北の隅から家の周りを経て西の側溝に流れる川をつくることができるのではないかと閃いた。そうすれば、水辺の環境ができ以前の植生には戻らないにしても多様性は少し回復し、景色も豊かになるのではないか。そう思ったのだ。さっそく妻に提案してみたら、返事は以外にも「良いね」だった。「川ができれば池もできるかもしれない」と妄想を広げたのは彼女の方だった。確かにジベルニーのモネの庭とはいかないにしてもスイレンの咲く池ができたならこの土地にも彩が加わる。それにここは粘土質の土地なので川や池の底に人工的なシートを引く必要もない。

問題は、どうやって川を引くかだ。ウンボをつかって掘れば一週間もかからずにできてしまうが、それはしないことに決めたばかりだ。それに、どれくらい幅と深さの川にすれば水が少ない時期にも川が枯れずにすむか。それには、試行錯誤が必要だと感じた。じゃあどうする。私の手元にあるのは先の尖ったスコップが一丁だけだ。掘る川の長さは少なく見積もっても百二十メートルはある。それをスコップ一丁で掘れるのだろうか。



ここに暮らして思うのだが、どうしたら良いか迷う時は、とにかくやってみることだ。やってみてわかることもあるし、思い通りにならなければやめれば良い。それも人一人の力でできることの良さである。

まずは川のルートを決める必要がある。普通は上流から下流まで水勾配を確かめながらルートを決めるのだが、測量する道具もないし、ホースに水をはって高低差を確かめるのも、この広さではやる気がしない。あれこれ思いながら雪解け水がたまつたところを実際に歩いてみることにした。歩きながらきながら水たまりを追ってみると、確かに飛び飛びであるが繋がる線が見える。いや、見えるような気がした。この見えない線に従って歩き続けると起点となる側溝までつながりそうだ。ここまでくれば自分の勘を信じて掘ってみるしかなさそうだ。

最後まで迷つたのは側溝のどこから川を始めるかだ。一番勾配が取れるのは当然、北隅の側溝の起点になる場所だ。ところがそのあたりはかろうじて水芭蕉が残っているところでそこを掘り返すのは気が進まなかった。その水芭蕉の小さな群落を過ぎた側溝の下流に起点を決めた。

掘り始めるのは下流からと決めた。私がまだ小さかった頃、実家のまわりは未舗装で雪解けの時期にはあちこちに水たまりができていた。その水たまりから棒切れで細い溝を刻んで川に見立てて水を流して遊んだのを思い出す。水たまりに向けて下流から溝を掘って水たまりの水が流れたら成功。次の上手の水たまりからまた溝を掘って水たまりがあつたところに繋げる。そして水が流れたら成功。それを繰り返して上流の起点まで行きつく作戦だ。まあ、原始的試行錯誤法だが、これは経験的にも確実な方法だと思つた。

最初の水たまりの水が流れた時には、おそらく私の目は子供の頃の水遊びの時のようにキラキラと輝いていたのではないだろうか。粘土質の土はスコップも入りやすく結構いけるような気がした。ただ、その期待はすぐに壁にぶつかった。木の根つこだ。大きな木のあるところは幹のまわりを大きく迂回するようにルートをとつたが、それでも太い根にあたる。その根を切ってしまう勇氣はなかつたので根の下の土を掻き出して水が流れるようにした。それは結構大変で太い根からは無数の細いヒゲ根が土の中に網の目のようであつて、それを先の尖つたスコップで切りながら掘らなければならぬのだ。それでも、次の水たまりまでという小さな目標があるからなんとか挫折せずに次に進むことができた。次に当たつたのは石だ。隣人も言っていたがここの土地からは丸石が沢山でるのだ。かつて、ここは海の下だつたことがありそれがつながり川ができた名残だと思う。スコップを突き刺してカツンという感覚が手に伝わったら当たりだ。どんな大きさでどこまで深く埋まっているのか探りながら掘り起こすことになるのだが、中には結構、手こずるものがある。

夢中になって掘っていたら、木々の間から我が家が見える場所まで来た。このペースで行けば一週間かからずに川は掘れるかもしれない。



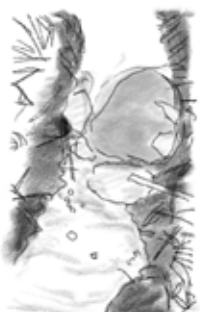
川を掘ると言っているが、幅はせいぜい三十センチメートルで、深さもスコップひとつが入る程度。それじゃ川というより溝ではないかと言われそうだが、そもそも水源が側溝を流れる水なのでしようがないのだ。町内のMさんからも、もっと広くしないのかいとダメ出しされているが、こればかりはどうしようもない。川幅を広くすればその分水深が浅くなり、夏の水が少ない時に川底が露出してしまう可能性がある。そんな規模だが、私たちにとっては立派な川なのだ。

時々、溝を水たまりまで掘ってもたまった水がうまく流れないことがある。原因は勾配が上流から下流にうまく取れていないからなのだが、どう修正すれば良いか。最初のうちは山勘であちこちスコップでさらってなんとか流れるようになっていたが、そのうち溝を掘る段階で足の裏の感覚で傾斜を把握できるようになってきた。人にはまちなかの生活で使わなくなってしまう感覚がいろいろ眠っているんだと思う。何かに夢中になってそれが蘇るのは気持ちが良い。これも原始的試行錯誤法の良いところか。

この方法の良いところはいろいろある。そのひとつに川のルートデザインがある。最初から計画的に掘り進めようとするのと全長の高低差と比較して程よい高低差の二点を探して、その間を直線的に掘ることになる。そうすれば結果的に最短のコースとなり労力も節約される。ただ、人工的な水路のようなデザインになってしまう。そこに曲線を入れようとするとなぜとらしくなる。それに対して原始的試行錯誤法は、自然にできたくばみを読み取りそれを繋いで掘っていくのでその地形に合わせて自然と水が流りたい形になってくる。そもそも自然に川が流れをつくっていくのと原理は似ている、自然の川は上流から形を決めてくるが、原始的試行錯誤法は下流からつくっていくという違いだ。

家の近くに川を掘る際には、掘った土を家側に堤防がわりに積んでみた。川を掘ったために増水時に家のまわりが水浸しになっては元も子もない。川上に行くにしたがって勾配も急になってきて上流の雰囲気が出て来た。結局、水源の側溝に行き着くまで四日で済んだ。あとは、側溝に堰をつくってコンクリート壁を壊すだけだ。コンクリート壁を壊すのには外かまどを作る時に手に入っていたコンクリート用のノコギリとタガネが役にたった。切れ目を入れたコンクリート壁に最後、金槌を打ち下ろすと側溝から掘った溝に水が流れ始めた。流れ落ちると溝の幅に水が広がって行くのを確認しながら、川に沿って下流まで辿っていった。途中勾配がゆるくなるあたりからは流れのスピードはゆるくなったが止まることはなかった。家の前のひらけたあたりを過ぎ、木々の間を縫うように流れ、一番下流の少し太い溝までたどり着き、源流の側溝と反対側の側溝に流れ落ち、川は貫通した。

上流の勾配が比較的急なあたりに掘った時に出て来た石を積んでみたら、そこを水が流れ落ちる時にチョロチョロと明るい音が聞こえるようになった。妻は「せせらぎが聞こえるおうちになったね。」と言って喜んだ。



#### 第四十七回 川と池を掘る(四)

次は池だ。これはどうすれば良いか結構悩んだ。一番心配したのは池がボウフラの楽園になってしまわないかということだ。ボウフラ対策にはメダカを飼うと良いと言われるが、適当に掘った池にメダカを放つと動物虐待にならないか。そもそも越冬できるような池にするにはどれだけ深くしなければならぬことか。いろいろ考えた末に、流れが常にある池をつくることにした。つまりそこだけ川幅を広く大きく曲がった川にして、その間をつなぐ水路もつくるのだ。そうすれば見かけは楕円形の池に中の島がある形になる。メインの広い川には石で堰をつくり池の水深が川より深くなるようにした。つなぐ方のサブの川にも堰をつくりある高さまで水が溜まったならそちらにも流れるようにした。増水時には調整池の役割も果たすのではないかと。

池のところは川よりも深く掘ることにしたが、そうすると急に石に当たる頻度が増して池のかたちができるまで二日かかってしまった。それでも川との境の土を切り崩すとどんどん水が流れ込み期待通りの池らしい姿になった。水面に目をやると池のように溜まっているけれど、流れがあることが確認できた。

川と池が完成してから数日たったら急に水量が減って来た。川下から川上に点検して歩くと、どうも側溝に設けた堰があまりうまくいっていないようで、多くの水がこれまでどおり側溝の方に流れているようだった。もし、側溝の水が増水した場合にそれが全て川に流れると氾濫して敷地が水浸しになってしまうかもしれないので、堰は側溝と川と両方に水が流れるようにしてあったのだが、その塩梅が難しい。それでも川が干上がってはもともとこもないので板を石で支えただけの堰を粘土も加えて水が漏れにくいようにしてみた。それと、そもそも側溝の水は常に水量が多いわけではなく落ち葉もたまり放題にしておくとしょこしょことした流れになってしまうのだ。今までは、それでも側溝が落ち葉で完全に埋まってしまわない限り問題はなかったのだが、これからは川のために落ち葉掃除が欠かせなくなってしまう。水を自分たちの役に立てようと身近なところに引き込むとそれだけ丁寧に面倒を見なければならぬということか。

そして、心配していた大雨もほどなくやってきた。川は掘った土を盛り上げた堤防のおかげで問題は無かったが、池が溢れてしまい中之島も水没してしまった。とは言ってもまわりに大きな影響を与えるほどではなくかえって植生の変化につながるかもしれないと思うことにした。ただ、水が引くまでの間、池の周りを歩くことができないのが不便だ。これまた家をつくった時の端材を見つくるって木道をつくることにした。木道と言っても板を引くだけなのだが、さすがに土に接する部分を少なくするために角材でかさ上げすることにした。さらにその角材を外かまどの火で焦がして腐りにくくするぐらいのことはしてみた。ついでに中之島に渡る小さな橋もつくってみた。この木道があれば池の周りが少々水没しても様子を見回ることができるし、水没していいときでもそれなりの景色をつくってくれた。

